



サハラ砂漠横断

児島盛之

〈出発点ヌアクシヨットに着く〉

十月十日、俺達はどうとうやってきた。サハラの西端モーリタニアのヌアクシヨットに。様々な日本での苦勞が思い出される……心の整理・両親への説得・休学届・資金稼ぎ・資料収集・トレーニング・出発準備。「この日」を信じていたからこそ、それらを乗り越えられたのであろう。しかし、もはや

全ては過去の事となってしまい、俺達はサハラ横断の零地点ヌアクに立っている。そして今、「静」から「動」へ移ろうとしている。

「百聞は一見に如かず」とはよく言ったものだ。ここへ来て初めて「果しなく広がる砂だけの世界、熱地獄サハラ」という一般的なイメージが壊された……。サハラの民は遊牧民であり、彼等は家畜を追って生活している。家畜が生きる以上そこには必然的に食物である草木が存在することになる。確かに暑い、しかし同じ人間が生きているのに地獄なるものが存在する筈もなかった……。日本では俺達の想像力はそこまでは働かなかった。それは実際に体験して初めて理解できるものであった。

〈ラクダ〉

かつて暗黒大陸と呼ばれていたアフリカにも、今や文明の波は押し寄せている。サハラにおいても同様、近年まで輸送、運搬に重要な役割を果たしていたラクダさえも奥地を除いては、今やそれが自動車に代わりつつある。首都ヌアクでラクダを求めることは不可能であった。俺達は現地人と共に、街から数

キロ離れた砂の中にラクダを捜しに行った。しかしそこには数少ない瘦せ細った、しかも高価なものしかいなかった。

十月十九日、ラクダ購入二頭約三十万円。「オマール（アラブ語で望むの意）」「神風号」と命名する。

ラクダは砂漠の船である。そのコブには、貧困な豚に耐えるように脂肪が貯えられている。水も一度に百リットル程飲み、一週間は水無しで過ごすことができる。足裏は偏平で、柔らかい砂の上を歩きやすいように、ワカンの役目を果たしている。

我々は、元遊牧民にコーチを受けることになった。幸いにも調教が行き届いたラクダであった為すぐ乗れるようになったが、世話が予想外に大変なことを知った。

サハラには、トゲの生えた木と微かな草が存在する。それがラクダの餌となる訳であるが、夜は自由に餌を食べるようにラクダを放すのである。放すといっても歩幅が狭くなるように三十センチ程の幅をもたせて両前足を縛っておくのであるが、それでも気ままなラクダは一晚の中に二〜四キロも離れた所まで食い歩きをする。朝、足跡を追ってラクダを

捜すことはこの旅の日課であった。風が吹き砂上の足跡が消された時などラクダ捜しに半日を費やすことさえあった。是が非でも見つけだす必要がある。サハラの旅はラクダにかかっている、と言っても過言ではない。

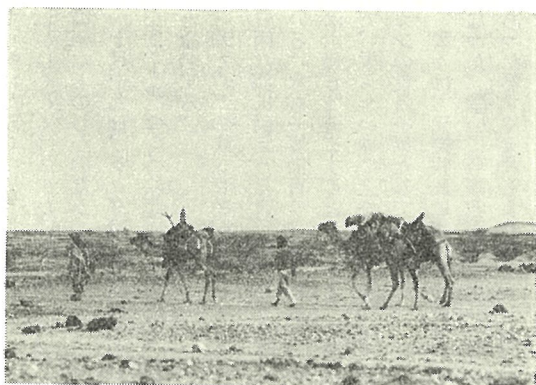
〈出発よりキファまで〉

「キファまでは良い道があり安全だ」と現地人から聞いた時、俺達は戸惑った。予定では氣候順化と乗駱駝の為の訓練期間を二ヶ月としていた。しかし、ある程度暑さに慣れ、舞砂も体験し、二人だけでラクダを扱えるようになった今、これ以上同じ場所を毎日を通ぐすことはじれったくもあった。「俺達は焦っているのだろうか？」と自問しながらも……予定より一ヶ月近く早い十一月七日、ポリタンク十リットル入四個、ゲルバ（山羊皮の水入れ）三十リットル入二個、食糧一週間分程、キャンプ用具、他装備、合計約二百キロを二頭のラクダに荷積みして、ヌアクを出発する。

サハラの旅は「単調」の一語に尽きる。全ての行動は時計の針に合わせられ、それと同様正確に動けるようになっていった……。

朝、日の出と共に寝袋を出て、燃料の小枝拾いに取いかかる。コーヒーとフランスパンの朝食を終えた後、ラクダの背に荷を積んで八時出発。朝の涼しいうちは、ラクダの負担を減らす為ひたすら歩き、暑くなり始める十時頃から鞍に乗り昼過ぎまでラクダの背に揺られる。

四十度は確実に越す日中の暑さは何ともたまらない。湿度が少ない為、吹き出す汗の汗も直接蒸発してしまうのでベタベタという不快感はないものの頭の中は真空状態。何かを考えようと思っても意識がフワッと拡散してしまう。昼過ぎから三時迄は昼食のコーヒーとビスケットを食べ木影でのんびり休息して、三時から日没の六時迄再びラクダに乗って進む。日没が一日の旅の終りである。荷を下ろしラクダを放し夕食の仕度にとりかかる。夕食は地域によって異なったものの、最初の二ヶ月間は、ジャガイモ、玉ネギ、山羊肉をいためたやつにパサパサの御飯という全く唯一のメニューであった。また夕食後のTEA TIMEはなくてはならない存在であった。日中の高温とは反対に、話し、考えるにはもってこいの涼しい時であった。しかし夜



アガダスを出て、ビルマへ向かう（後ろが飯田さん）

中になると温度は零度近くまで下る。砂の上で寝袋に入り、二枚の毛布を上から重ねてもまだ寒い時さえあった。サハラはあくまでも人間を拒絶してやまない。

サハラでは遊牧民さえ十日以上連続して旅することは稀である。しかし俺達にとつては毎日が旅である。ヌアクを出発して以来、ラ

クダは日に日に衰弱してきた。腹はアバラ骨がみえる程瘦せ細り、栄養のバロメーターであるコブも没してきた。おまけに「オマール」は鞍ズレの為背中を、「神風号」は鋭い石を踏んで足裏をそれぞれ負傷してしまった。旅が続く以上、傷の回復は有り得ない。十二月五日俺達は止むなく、六百キロ行った所のキファで、十万円出して新しいラクダと交換しなくてはならなかった。

〈キファからガオまで〉

新しいラクダ「無砂死」と「卑弥子」に代わってからというものの、旅慣れてきたせいもあって進行距離も延びてきた。年の瀬も近い十二月二十七日モリタニア最後の町ウアラタに着く。ここからトンブクツまでにはルートもなく、遊牧民も少なく、井戸も少ないというこの旅の第一番目の難関である。迷った揚句二人だけの旅を断念して、生命尊重でトンブクツまではガイドを雇うことにした。

サハラにおいては水は生命を左右する貴重なものである。俺達はコップの底さえ見えないような濁った水にはすでに慣れ切っていた。しかし（ウアラタから七日目の所にあっ

た）バcssリーエの井戸水には悩まされた。

大概、井戸端の人達は親切で、俺達には優先的に汲み上げた水を分けてくれるのであるが、この時はそうではなかった。相手にしてくれなかった為、水を飲んでいる山羊達をかき分けて、家畜用の桶から拝借した。井戸の周りは水や家畜の糞でぬかり、そのぬかるみを歩いてきた山羊などが桶に足をつつ込んで水を飲む。その残り水を汲むのであるからその汚なさはこの上ない。濁りはともかくも、ドブの臭いとも、バキュームカーの臭いとも思えるあの悪臭には泣かされた。それでも飲まないわけにはいかない。

一月二十八日、距離的にみて、ガオでラクダを交換するのを感じていた。しかしトンブクツまではあれ程頑張った卑弥子がガオを目前にして病氣と疲れの為に倒れた。俺達にできることは何もない、もはや連れて行ける状態でもなかった。哀れ卑弥子はサハラの砂に戻った。一月三十一日ガオ着。

〈ガオよりアガダスまで〉

二月二十一日再びラクダを買い換えガオを出発した。今度の相棒は「ジャンヌ」と「竜」

である。

ニジュールを目前にして問題が一つあった。それはビザを持っていないということである。入国するには当然ビザが必要である。しかし取得を試みたにもかかわらず入手できなかった。そのまま入国してみる以外に手はなかった。三月十七日、タホア着、予想通りポリスオフィスへ出頭させられる破目となる。しかし幸運にも三日間拘留されだけで無罪放免となったが、タホアの町で思いも寄らぬことが起った。「ジャンヌ」が鼻輪を切つて逃げ出し工事中のバラ線で足を切つたのである。ラクダにとって足は致命傷。「ジャンヌ」は死んだ。ラクダを傷つけるたびに俺達の心は痛んでいく。再び新しいラクダ「コントヨタ」を買つてタホアの町を出発したのは三月二十三日であつた。四月五日アガデス着。

＜アガデスより終点ビルマまで＞

アガデスより先には、全く砂だけのテネレ砂漠が待っている。ビルマから岩塩を運んでくるキャラバンさえも十一月～二月のみで、今や誰一人ラクダでテネレに足を踏み込もう

とする者はいない。この季節となつては氣候が悪く、ガイドを使つても容易なことではない。四月十一日、俺達はガイドと共に三頭のラクダでアガデスを出発した。

テネレにあつて、日中進むことは困難であつた。昼間は特設の毛布のテントの中で、ひたすら涼しくなる夕方を待ち、星を頼りの夜間走行が主となつた。歌の文句通りの月の砂漠である。しかし、苦しい歩行である。ラクダにとつても苦しさは同じ。俺達は砂に足が埋まるなかを歩き続けた。ラクダに乗るのは歩き疲れた時だけである。

何処までも果てしなく続く砂丘。大きくオレンジ色に輝く砂漠の月。肌色の砂だけの世界テネレ。

多くの人達が支援してくれたからこそ俺達はこのままで来れたのだ。決して己れだけの力ではない。

五月三日、最終点ビルマ着。

★全行程四一五〇キロ・所要日数一七八日★

(大学工学部 三回生)

